

# 自動の知の問題性

教科領域・教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

指導教官 綿引 勝美

今西 崇

## 0. はじめに

問題は、あたかもわけなくひとりで行われている、ということである。スポーツの優れたプレイヤーのパフォーマンスを考える時、なぜ、ここで、いま、そんなことができたのか、ということに思いを巡らすことは多い。しかし、そう“いうこと”ほど不思議なことではない。

われわれは一般にこのことを“自動”的だという。この“自動”ということがもつ最も重要な問題を提出することが、本論文の目的である。

## 1. “自動”の論理

われわれがよってたつ“自動”の論理の問題は何か。様々な領域における“自動”に対する記述によれば、“ない”ということの論理的問題が認められた。そこで、この否定の論理を分析的に考察した。

まず、“自動”の全否定とは、当然“自動”そのものがありえないことを表す。よって、この“当然さ”を作り出している“自動”の知が何によって支えられているのかが問題になる。部分否定による分析からは、“自動”は“他動”と“手動”が対置される。ただ、これは“自”との対置であって、“自動”それじたいを問題としていない。

最も重要な問題は、体育・スポーツ科学の分野で取り扱われるべき“自動”がもつ特殊性にある。それは、われわれ人間の動作や行為それじたいと“即ち”の関係で存在している。“自動”

は、身近すぎるくらい身近なことなのである。

## 2. アウトスを巡って

“自動”は、“アウトス”(autos)という語を語源にもつ概念“アウトマティズム”(automatism)の訳語である。よって、autosがもつ豊かな意味を考察の対象とすべきである。

アウトマティズムに関する問題は3つある。第1に、機械的なアウトマティズム観は無考慮な“確信”に基づいている。第2に、アウトマティズムに“見え”るのか、われわれがそう“見る”のかという問題がある。“見る”と考えるなら、アウトマティズムは常に背景に退く。すると第3に、寺田寅彦の言うように、人間はアウトマーテン(自動人形)であることになり、アウトマーテンでなくなるの方がむしろ難しい(寺田1996)、と“考える”ことができる。

つまり、問題はアウトマティズムについての知に関わる。ただ、知を否定する者は、すでに知を前提とし、知に組み込まれている。そこで、知るとか知らないとかいうことではない“非知”がその手がかりとなる。理念としての“非知”への指向性をもつものとして、運動論の立場がある。そこでは、動作になっていくことが考察の対象となりうる。アウトマティズムは、“一でなく、一である”というような理解を嫌い、“ある”こととしての“知”に落ち着くことから逃れつつける。

## 3. 自動とベルンシュタイン

ベルンシュタインという人は、運動に留まろうとした。そんな彼の自動観は、次の記述に表れている。「自動性を定常的なステレオタイプとみなすことが全くの間違いだということである。自動性は、それらが実現されるレベルの特性と手段がもつ高度の適応・バリエーション能と可塑性を意のままにする。その特殊な独自の性質は、自動性とその実現に向けて意識的になる必要がない場合にしかない。」(Bernstein, 1947/1996) ベルンシュタインのいう自動性は、「動作ではなく修正」(Bernstein, 1947/1996)であった。そこでは常に、能動性の立場から自動が語られていた。

#### 4. 自動の知の問題性

自動の論理は、まさにその通りであることを、そのまま“まさにその通りである”、といて手を加える論理である。これは、わかることから逆方向へ向かっている。自動がもつ実質的なズレのなさ、決定的なズレを突然に引き起こす。ズレもなければわけもない、それがズレでありわけなのだ。しかし結局、“わけ”はいつも“わけなく”問われてしまう。

軌道を修正し、“わくわく”へと抜け出よう。すると“わくわく”は、ともに何らかの動作感情に支配され始める。それは、取り返しのつかない一回性というグロテスクな動作感情、それに対する反復性というグロテスクな動作感情である。われわれは、自動をグロテスクへと向かう“わくわく”として捉え直すべきである。“わくわく”がもつこの“ない”の唯一性は、大きな多様性として残されてはいないだろうか。

“わくわく”するスポーツでは、トレーニングが試合で生きるということは、トレーニングで行ったことが試合にそのまま出るということではない。プレイヤーはいつも、不完全な状態

で試合に立ち向かっているからこそ、トレーニングが試合で生きるのである。自動化された動作は、高度にコーディネートされた動作として現象する。自動が持っている性質を危うさとして捉える考え方は、一義的な関連性からみた時の話である。自動を自動と呼ぶことによって現象として意味をもつとはいへ、ベルンシュタインのいうように、自動じたいは動作ではなく修正である。したがって、自動とは常に、言っていることとやっていることが少しずつズレてゆくことであり、非一義性そのものとなる。

つまり自動は、“知ってはならない”というべき非知の状態にある。そこにはプレイが存在する。最も決定的な働きをする動作器官、何も知らないと同時に知ることが許されていない自動、そして自動化された動作のもつ意味を完ぺきに知ることはできても無能の観察者でしかない意識が関わっている。このプレイは、非知に基盤を構えている。それは、自動がこの非知を破ってしまった時、二度とその以前のプレイには戻ることができなくなるからである。ところがこれは、意識にとっての屁理屈となる。

アウトスとしての宿命として自動は、主語となることを嫌うが、知を指向する。つまり、われわれの知は、無能の観察者ではなくプレイヤーだった。

われわれはこれまで、自動ということによって、自動の外部を記述することができた。これは一方で、自動の内部の問題性を複雑化している。われわれにとって、自動の内部をどのように記述していくのか、ということが大きな問題である。これは、自動に手を加えることを意味すると同時に、自動ということじたいが消えることでもある。それでも私は、自動の内部を語るべきであると主張する。